
シンポジウム

論題 中世哲学における〈ことば〉

司会 上智大学 大谷啓治

提題：十一世紀の言葉論—アンセルム
スの前期作品を中心にして—

神田外語大学 古田 暁

提題：「唯名論」の成立と展開

京都大学 岩熊幸男

(於 関西学院大学 1989. 11. 12.)

司会

大谷 啓 治

シンポジウムのテーマとして、「中世哲学におけることば」がかかげられたのは、今回が第二回である。第一回の昨年は、アウグスティヌスにおけることばの問題を中心に、二人の提題者によって、アウグスティヌスとオリゲネスおよびアリストテレスとの関連がそれぞれ論じられたが、第二回の今年は、一足飛びに十一、十二世紀が取り上げられることになった。この時代への影響の大きさからみれば、プリスキアヌスはともかくとして、すくなくともポエティウスについては、一度シンポジウムで論じられてもよかったのではないかと思われるが、いかがなものであろうか。

十二世紀の後半になると、主としてシャルトル学派において、*quadrivium* への関心がたかまることになるが、そのシャルトル学派でもすぐれた文法学者がいたといわれており、十一、十二世紀といえ、なんとといっても *trivium* の時代であった。それだけに、この時代において、ことばは重大な関心事であったといつてよいであろう。

すぐれたアンセルムス研究者の一人、古田暁氏は、十一世紀の代表としてアンセルムスを取り上げ、あらゆる著作にわたって論じられる言葉と思惟の問題の基本的枠として、『モノロギオン』第十章における、①感覚的記号を感覚的に使うか、②感覚的記号を非感覚的に思念するか、③諸物自体を私たちの精神のうちに表現するか、とい

う話法の三層構造に着目、①と②を言葉と思惟についての意味論的次元、③を存在論的次元での考察とみなし、両次元について詳しく論じた上、両次元に同時に深くかわる例として『プロスロギオン』第二～四章をとらえ、さらに、アンセルムスの言葉と思惟論が『モノロギオン』『真理について』における存在論的世界から、『プロスロギオン』『グラマティコスについて』のより意味論的世界へ展開するのは、当時の神学への *dialectica* の導入に促されて、プラトンの思惟にアリストテレス論理学が方法論として適用されたものと解釈できよう、と結んでおられる。

つぎに、中世前期における論理学について、写本にもとづいた緻密な研究を続けておられる岩熊幸男氏が、十一、十二世紀のことばをめぐるもっとも重要な問題の一つとして、普遍論争を取り上げ、とくに「唯名論」の成立と展開に関し、いくつかの新しい問題点を提示された。さまざまな写本によれば、十二世紀前半まで、普遍の問題は *res* か *vox* かをめぐる論じられ、普遍は *vox* であると主張したものは *vocales* と呼ばれていた。最初にヨハネスが論理学は *vox* に関する学であるとして、この *vocalism* を提唱したが、それを展開させて普遍は *vox* であると主張したのが、その弟子ロスケリヌスで、ここから古代の文脈を離れた新しい形の論争として普遍論争が生じた。ことばの論理的考察はそのままものについての存在論的考察であるとする立場に対して、それは必ずしも存在論であるわけではないと考えるのが *vocales* の立場である。以上の論述ののち最後に岩熊氏は、十二世紀後半に現れる *nominales* という名称は最晩年のアベラールの後継者を指すと主張された。

両提題者の討論に続く質疑では、渋谷克美氏が、アベラールが普遍を *vox* から *sermo* へと変えた意味を問い、清水哲郎氏は両提題者の議論のきっかけとして、『プロスロギオン』の神存在証明と普遍問題との関係などいくつかの問題を提起、日下昭夫氏は *praedicabilia* の数および *trivium*、水落健治氏は *dialectica* について、質問あるいは意見を述べられた。全体として司会者の無能のため、議論が十分にかみあうにはいたらなかった。しかし、古田氏も、アンセルムスの議論の理解にとって、当然のこととして前提されている問題や状況の十分な知識が重要である、と述べておられたが、そのような正確な知識の不足をおぎなうものとしても、岩熊氏のような研究の重要性を大いに感じさせられるシンポジウムであった。